

9月18日（月）に私はボストンへの直行便 JL 8 便の機上の人となっていました。思いがけない旅であると同時に、長い間、夢見ていた旅でもありました。実は、この旅は、言語学者（元



国際基督教大学教授）であり、江戸期漂流民研究者である稲垣滋子さんのお供です。イスラエル旅行で稲垣さんとお友だちになり、書かれたものを読み、心惹かれたものがありました。それは江戸時代に、嵐に遭遇し、難船し、漂流して、外国人に救助されても、帰国が叶わなかった船乗りの姿です。一人は、初めて日本語訳聖書の「ヨハネ伝」を出版したドイツ人ギュッツラフに協力した「音吉」（? - 1867）、もう一人はアメリカ市民権を得て、アメリカ人として帰国した「ジョセフ・ヒコ」（1837 - 1897）です。

今回、稲垣さんはアメリカに残っているジョセフ・ヒコに関する記録や資料、史跡を調べ、確認するために、ハーバード大学、マウントオーバン墓地、マーサズ・ヴィニヤード図書館などを訪ねる旅に誘ってくださったのです。稲垣さんは、現在の恋人がジョセフ・ヒコだと言われます。

この5月にジョセフ・ヒコ記念会が、「日本で最初に新聞を発行した人」として顕彰し、東神奈川から中華街までのジョセフ・ヒコの史跡をたどるツアーを行いました。明治維新の頃の横浜の港は現在と大きく違って、私の地元でありながら、何も知らなかったことに、衝撃と恥ずかしさを感じておりました。

彦太郎は播州で生まれ、母の死後、養父の職である船乗りに憧れ、13歳で見習いとなりました。初めて乗った栄力丸が江戸からの帰途、遠州灘で突風に遭い、53日間漂流し、アメリカのオークランド号に救助されました。サンフランシスコに着き、日本人として初めて撮られた写真が上の図です。帰国を願いながら、しばらく船員として働きましたが、サンダース税関長に見込まれ、16歳からボルチモアの彼の家で学び、カトリックの洗礼を受け、ジョセフ・ヒコとなりました。様々な援助や協力を得て、働き、21歳でアメリカ市民権を得て、1859年22歳の時アメリカの領事ドールの通訳として神奈川に入りました。ヒコは激動の江戸末期、日本の開港、通



商、貿易などで、日米の架け橋となりました。横浜で「海外新聞」という日本語の新聞も発行し、それが日本の新聞1号とされています。結婚し、日本で暮らしましたが、青山の外国人墓地に眠っています。日本では大名や幕府や新政府の要人らと会い、アメリカではリンカーン大統領らとも会いました。多くの人に愛され、有用な人物として大事にされました。彼が恩義を受けた人への感謝の思いを込めて送った品物がハーバード大学のピーボディ考古学・民俗学博物館、比較動物学博物館、魚類学博物館に保存されています。それらを確認し、記録を残すのが稲垣さんの願いです。